



「秋を感じる花手水」石場楓
(本学国際英語学部学生 / tachibana photo)

平安の昔から、
「昔の人」の懐かしい思い出を
呼びおこすとされた橋の花の香り。
その橋を最も好んだ「時の鳥 (ホトトギス)」。
「CHRONOS 時の鳥」は、
ギリシア神話の「時の神」クロノスを頭上に戴き、
「時」の天空をはばたく鳥を
イメージしています。

クロノス [時の鳥] vol.49 2023.10

C
O
N
T
E
N
T
S
〈巻頭エッセイ〉
ジェンダー・ストラクチャー研究ユニットの紹介
過去に開かれた窓 4
作品のウチソト 4
歴史遺産とジェンダー 4
イギリス女性生活誌 49
近代日本音楽史を彩る女性たち 10
女性歴史文化研究所 第30回シンポジウム報告
INFORMATION

ジェンダー・ストラクチャー研究ユニットの紹介

村上 裕道 本学文学部歴史遺産学科教授

京都橋大学女性歴史文化研究所は、二〇二二年度に創設三〇周年を迎えました。その間の研究状況は表一①「これまでの女性歴史文化研究所（以下、女歴研）」研究プロジェクト一覧」に示すとおり、第一プロジェクト「歴史における家族と女性」から第一三プロジェクト「社会における女性の活動」まで、女性史・女性文化をキーワードとした研究活動を展開してきました。ただし、女歴研開設当時（一九九二年）は文学部のみで単科大学であったことから、文学部における研究活動の域を超えていないことが、研究テーマからもお分かりいただけるかと思えます。

一方、本学は、この三〇年間に九学部を擁する中規模大学となり、総合大学として各種の研究実践するところとなりました。そこで、女歴研も大学付置の研究所として、文理融合的視点からの研究課題が望まれるところとなりました。

そのため、文学部教員を中心に構成されていた運営委員会に昨年度からは経済学部や看護学部からも参加していただき、新体制で女歴研の運営を進めていくこととなりました。

そして、今年度から（表一①）に示す第一四プロジェクト「女性を取り巻く環境Ⅰ」を立ち上げましたが、テーマ①「ジェンダーの構造を考えるー本学学生に見る専門

職能意識とジェンダーの萌芽」は、研究メンバーとして、文学部から村上・山内・中久保、経済学部から竹内、工学部から加藤、看護学部から那須ダグバ・小西・伊藤の各先生方が参加した、学部横断型共同研究として、スタートしたところです。

また、このテーマ①は、同時に京都橋大学の重点研究分野「女性の歴史を学び、女性の未来を考える」を進めるための研究ユニットとして採択されています。

本研究の目的及び研究意義として、「ジェンダーは、男女の性差が社会的な差に単純に反映されるだけでなく、男性も含めた社会的構造のゆがみが強調されて女性に集約される傾向がある。」と指摘し、大学において職能に関する教育を受け、一見、男女の性差のない条件下、職業に就く専門職においても、女性の方が離職・転職等の割合が多いことを挙げています。

本学では、国家資格を取得し、教師・建築士・看護師等、専門職として業務に従事するジョブ型の職能を選択している学生や、メンバーシップ型の公務員等に就く学生が多数います。しかし、彼らが大学において専門職等を目指し始めた時点から卒業後の状況について、社会的な構造のゆがみがどのように影響を与え、中途離職や転職等の判断にいたっているかなどの長期的な視点からの調査は未だ行われていません。

本研究では、本学学生が職業を選択し始めた初期の段階から、職業を選択し、就職し、そして、年齢を重ねてリタイアするまでのさまざまな人生の段階において、性差により生じている社会的な構造のゆがみや、その構造が生み出す社会的な課題であるジェンダー（格）差について、追跡調査を行うことにより明らかにするものです。

なお、本年度の研究では、前述の本格的な研究の開始に向け、まずはジェンダー・ストラクチャー研究ユニットとして二年間の基礎的な研究「本学学生に見る専門職能意識とジェンダーの萌芽」を実施し、その後は、女歴研の主眼的研究と位置付けて、さらなる研究を展開したいと考えているところです。

主たる調査として、看護学部学生へのウェブのアンケート調査で職業選択に関する意識調査を実施し、その後、情報工学科の学生等へデータの集計を依頼するとともに、データ項目の分析を行い、来年度はクロス分析を実施する計画です。さらに、外部研究者との協力関係の構築についても取り組み、大澤眞理先生（元東京大学社会学研究所長／東京大学名誉教授）へのヒアリング調査を実施しているところです。

最後になりますが、巻末の INFORMATIONにも示す通り、女歴研は本学の重点研究分野の一つ「女性の歴史を学び、女性の未来を考える」の推進のため、これからも女性史・ジェンダーの研究拠点として活動を進め、地域や社会に開かれた大学としての使命を果たしていきます。

本研究はこれらの趣旨に合う、今後とも拡大・展開していくべき重要な研究でありましょう。そのためには、研究者の陣容をより充実させる必要があります。全学部からさらなる参加を募り、研究のより一層の発展を目指したいと考えています。

表一① これまでの女性歴史文化研究所 研究プロジェクト一覧

研究プロジェクト名	期間（年度）	研究テーマ	代表者
第1プロジェクト	1993～1997	歴史における家族と女性ー日本と世界	細川 涼一
第2プロジェクト	1993～2004	現代社会と女性（特別プロジェクト）	鎌田 明子
	2004～2007	女性文化の再生産過程ー母・娘関係の研究	河原 和枝
第3プロジェクト	1993～2007	西欧女性史研究ーフランスを中心に	志賀 亮一
第4プロジェクト	1993～1994	D.H. ロレンスの愛と性	杉山 泰
第5プロジェクト	1994～1996	地域女性史研究 大阪府枚方市の場合（枚方市よりの受託研究）	田端 泰子
第6プロジェクト	1998～2002	京都の歴史と女性	細川 涼一
第7プロジェクト	2001～2006	文学に見る『悪女』観の形成	鈴木 紀子
第8プロジェクト	2004～2007	女性生活文化交流史	横田 冬彦
第9プロジェクト	2004～2007	ホスピタリティと女性文化	松浦 京子
第10プロジェクト	2008～2012	歴史における女性の身体と看護・医療ー生・老・病・死ー	細川 涼一
第11プロジェクト	2009～2012	現代の表象文化に見るトランスジェンダー	野村 幸一郎
第12プロジェクト	2013～2017	装いと身体の歴史	南 直人
第13プロジェクト	2018～2022	社会における女性の活動ー京都とその周辺を舞台にしてー	増淵 徹
第14プロジェクト	2023～2024	女性を取り巻く環境Ⅰ テーマ① [ジェンダー・ストラクチャー研究ユニット] ジェンダーの構造を考えるー本学学生に見る専門職能意識とジェンダーの萌芽ー	村上 裕道
	2023～2025	女性を取り巻く環境Ⅰ テーマ② 歴史学からみる共同体と女性	野田 泰三

過去に 開かれた 窓



岡島 陽子

本学文学部歴史学科専任講師

4

地方から都に来た女性—「采女」

日本の古代から中近世にかけて、朝廷には「采女」と呼ばれる女性が働いていた。彼女たちは、もともと郡司（豪族から選ばれた地方役人）の子女姉妹であり、地方から天皇のもとに召されて食膳奉仕などの役割を担っていた。

この説明だけを知ると采女というのは、実に「可哀想」な存在だと感じるかもしれない。実際、彼女たちの存在について民俗学の折口信夫は、采女は地方で最高位の巫女であり、その巫女を天皇のもとに仕えさせることで、地方の神々を服属させることを意味すると考えた。また日本史学の立場から門脇禎二は、采女の巫女的な性格は否定するものの、やはり地方豪族の服属を証明する人質であり、女性の地位没落

の象徴と指摘している。

福島県郡山市では、この采女を主役にした「うねめまつり」が毎年八月に開催されている。残念ながら筆者はこの祭に参加したことはないのだが、公式ホームページをみると、祭の由来について次のように記載がある。陸奥国安積郡（現在の郡山市）で冷害により不作が続いていたところ、都から視察にやってきた巡察使・葛城王が里長の娘・春姫を気に入り、彼女を采女として帝に献上する代わりに税を三年間免除した。春姫は都で帝の寵愛を受けたが、地元に残してきた次郎という許嫁を忘れることができず、都から安積の地に帰るために平城京の東の猿沢の池に偽装入水をする。そして地元に戻った春姫だが、そこで次郎がすでに亡くなっていたことを知り、今度は本当に井戸に身を投げるといふ物語である。こうしてみると、まったくの悲劇であり、采女として都に行くことは税免除の代償としての人質といえるだろう。しかし、この物語は実は複数の伝承を組合せて成立したものであり、特に『万葉集』巻一六の歌と『大和物語』一五〇段が主要な構成要素となっている。

まず後者の『大和物語』は、一〇世紀ごろに成立した歌物語である。この

一五〇段は「ならの帝」に仕えていた大変容貌の優れた采女が、ほかの貴族からの誘いを一切断り、ただ帝の寵愛を望んでいたところ、一度だけ召しがあつたが、その後途絶えたことを悲観して猿沢の池に入水する説話である。猿沢の池は現在も興福寺横にあり、ほとりには采女神社が鎮座していて、この説話をもとに采女祭が開催されている。一見すると、帝から見捨てられていることから采女の悲劇的な物語であるが、よく考察してみると貴族との恋愛の可能性は認められており、性愛面で実に自由な存在であったことがわかる。つまりこの説話は、采女が天皇への人質として抑圧されていた物語ではなく、都で愛を求めて生きた女性の物語なのである。

もう一方の『万葉集』巻一六所収の歌は、

安積山 影さへ見ゆる 山の井の
浅き心を 我が思はなくに

というものである。この歌を受け取る人物は、「うねめまつり」の由来にも登場する葛城王である。この葛城王は後に橘諸兄（六八四―七五七）と名を改め、左大臣までのほりつめた人物と考えられている。ただし歌を詠んだ人物は、後に采女となる春姫ではなく、元

采女として出仕していたが、都から安積の地に戻ってきていた女性である。陸奥国に視察にやってきた葛城王が国司（都から派遣された地方行政を司る役人）から接待を受けるが、葛城王の満足するものではなく、不機嫌になってしまった。そこに都で出仕していた経験のある元采女の女性と呼ばれて、先の歌を詠み接待したところ、葛城王はその風流を解する様子にすっかり機嫌をなおして宴を楽しんだ、というものだった。このようにもともと物語は、地方の女性が人質として召し上げられる話ではなく、采女経験のある女性が都での勤務経験を生かして困難を打破した物語なのである。

現在、郡山市や奈良市で行われている采女祭は、ともに戦後の地域発展政策として開始されたもので、古代までさかのぼるものではない。祭の由来である采女のエピソードも後世の知識が加わったもので、采女本来の性質を示したものではないのである。

では、もともとの采女はどういった存在だったのだろうか。現在の研究では、最初に述べた折口や門脇の説は否定されつつある。地方から都に働きに

ではなく、男性にもトネリ・兵衛という同様の存在がいることが指摘されている。つまり男女ともに天皇支配を受けるのと引き換えに地方から労働力が徴発されており、采女もその一種だったと考えられるのである。元来采女の研究では「女性」という性が注目され、性愛を含む人質と考えられてきたが、女性性というフィルターをはずして存在を見つめ直す方向に変化している。

采女として都で働く女性の中には、類まれなる出世をする者もいた。飯高諸高は伊勢国飯高郡（現在の三重県）出身の采女であるが、四代の天皇に仕え八〇歳になるまで働き、女官組織のナンバー2である典侍という役職まで昇進し、従三位という破格の位階を得ている。それだけでなく一族の男女の地位を引き上げることも貢献しており、飯高氏は後には嵯峨天皇の寵愛を受けて源常という子を儲ける女性も輩出している。諸高の働きは、かなり稀有な例ではあるが、采女として都で働きながら女官として重要な立場を得た古代版「キャリアウーマン」は数多く存在していた。

以上のようにみても、采女は必ずしも「可哀想」とまとめられる存在ではない。都で確固たる地位を築き、

生き抜いた女性なのである。京都橋大にも、親元を離れ京都という地に入り込んできた学生もいるだろう。この地でどう学び、何をやるか。ぜひ有意義な時間を過ごしてほしいと思う。



口論は誰のせい？

千々岩 宏晃 本学文学部日本語日本文学科専任講師

人間関係において口論やめ事が起こった時、その理由を説明することは容易ではありません。「育ってきた環境が違う」からでしょうか。「価値観の違い」でしょうか。相手や自分の「性格」や「気質」のせいでしょうか。私たちは、言語使用を起因としたわだかまりの理由を、性格や価値観などの個々人の「ウチ」に還元することに慣れていきます。

現在、他者理解の主流な考え方となっているのは、「私とあなたは違う」ことをコミュニケーションの前提におく、異質な他者とのやりくりです。確かに、この態度は同質性や同調を求めすぎる日本社会^①においては、たびたび必要な態度であるといえます。しかし、この態度は、わだかまりの理由を教えにくるわけではありません。「分かって合えない」際になんとか他者とやりくりをしたとしても、やはり理由は気に

06行目以降、言い争いに発展していきます。では、この理由に何があるのかを考えてみましょう。ここで大切なのは、観察できない側面（夫の気づきの悪さや妻の期待値の高さ）は排除し、操作可能な言語のやり取りにスポットライトを当てること、そして何より、「誰かのせい」にしてしまわないことです。

その目で見ると、この口論の理由となっているのは、妻の01行目での発話「デザインであることがわかります。01行目が発された段階では、07行目からわかるような「気づき」や「答え」を求める「クイズ」の「出題」としてはデザインされていません。たとえば、「さて、洗面所に新しく買ってきたものがあるんだけど、それはいつたいなんでしょうか？」のような明示的な「出題」形式の発話と比べてみてください。

さらにもう一点重要なのは、特にコロナ禍において「手を洗ったか」を尋ねることは、「注意」、ないし「手をまた洗ってないでしよう」という「非難」として聞かれる発話であることです。このような局所的な社会規範もまた、観察には重要です。

このように出来事を一行ずつ追っていくと、01行目で「洗面所で何が変

なるものです。

ですが、だからといって、その理由をある人のウチ（心の中であれ脳内であれ性格であれ、価値観であれ過去や経験であれ）に求めるのであれば、そこには「救済」がないように思えます。私たちは自らの脳構造や性格や価値観をまるきり変えることが難しいと知っているからです。

ただし幸いなことに、私たちは自分の言語使用（いわゆる「言葉遣い」）を工夫しようとする自省的・自制的な態度を持っています。そう信じているから、私たちは、言語を起因とした問題が起ころうとしても、自らが操作・調整できる範囲内で、わだかまりを解消する方法を日々探っているのです。これまでの議論から、このように言えます。「人は確かに『分かって合えない』ことから始まるべきではあるが、救済を求めようとするのであれば、そこには工夫でき

わったかをあてるクイズの出題」という行為が行われていた際、夫にはそれはわからなかったことが明らかになります。そして、それが口論の理由（の一つ）になっています。夫が02行目で「洗ったよ」と答えたことで、01行目を「質問」として聞いたこと、「注意」や「非難」として聞いたかもしれないこと、そして、「クイズ」とは受け取らなかったことがわかります。

このように、この口論の理由を「言一方の不十分さ」であると考えれば、私たちはそもそもこの二人の性格や価値観を口論の説明装置として用いる必要がなくなります。「女は男に期待しすぎだ」とか、「その夫は言い方に文句ばかり言って、なっていない」などというウチを用いた説明はそもそも不要なのです。妻は01行目をより「クイズの出題」としてデザインすることもできたでしょうし、夫は06行目で妻の行為に「感謝」を示すことも、できたかもしれないかもしれません。この操作可能な言語的領域に気づくことが、小さなすれ違いや言い争いの理由を発見するためには必要なのです。

言語哲学者のギルバート・ライル^④は、人間のウチ（心的側面）とソト（行動）に関する議論を、永遠に打ち返される

る、つまり操作・調整可能な言語的領域があると仮定するほかない。」

では、実際に口論が発生したとき、そこにはどのような操作・調整可能な要素があるのでしょうか。ここで、いわゆる「悩み相談サイト」をケーススタディとしてみます。悩み相談サイトには、様々な口論や言い争いが詳しい経緯などとともに記されています。ある悩みの相談^③を参考にしてみましよう。そして、言葉のやり取りとして観察するために、以下のように発話だけ取り出してみましよう。

断片・手洗った？
（ハンドソープディスプレイが壊れていて、新しいものを妻が買った。妻が夫に聞く。）

01 妻…手洗った？
02 夫…洗ったよ。
03 妻…なんか直ってたね。
04 妻…違うよ。
05 新しいの買ったんだよ。
06 夫…何が言いたいの？
07 妻…新しいのにしたんだけど気づくかと思って。
08 夫…じゃあ「新しいのにしたんだけど気づいた？」
09 夫…って言えはいじゃん。

（バトミントンの）シャツルのようだと揶揄しています。私たちはウチ・ソトの二元論へと無反省に論を進めるのではなく、そこにある現象を観察し、そこから得られた知見を反省的に用いることが求められているように思われます。そしてそのためには、正確な言語の観察力を身に着ける必要があるように思われるのです。

謝辞…本稿は二〇二一年度の本学の授業「言語コミュニケーション論」および二二・二三年度の「日本文学講義Ⅲ（社会言語学）」の議論がもとになっています。活発な議論を行ってくれた受講生の方々に感謝します。

- 1) 例えば、平田オリザ「わかりあえないことから」講談社、二〇二二年。
- 2) 読みやすいものは、貴戸理恵「あなたを丸めこむ『ずるい言葉』」WAVE出版、二〇二三年。
- 3) くだらない事で旦那と言ひ合ひになりました。—Yahoo!知恵袋：
https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q11234037141 (Retrieved 08/25/2023)
- 4) ギルバート・ライル『心』の概念「みすず書房、一九八七年。

戦後の図書館づくり
住民運動にみる女性

嶋田 学

本学文学部歴史遺産学科教授

日本の近代公共図書館の幕開けは、一九五〇年四月に制定された図書館法を待たねばならなかった。戦前は「図書館令」という勅令で規定され、図書館は資料を保存する場所であり、国民が身近に利用するものとはなっていなかった。ただ、気軽に本を借りることのできる「まちの図書館」が全国に設置され始めるまでには、あと十数年の時間が必要だった。

戦後、図書館界では、図書館法制定に向けて、公立図書館の義務設置を要望していたが、厳しい地方財政の状況やGHQの指導等もあり、自治体が任意に設置するものとなった。一方、一九五〇年代後半の図書館界では、不

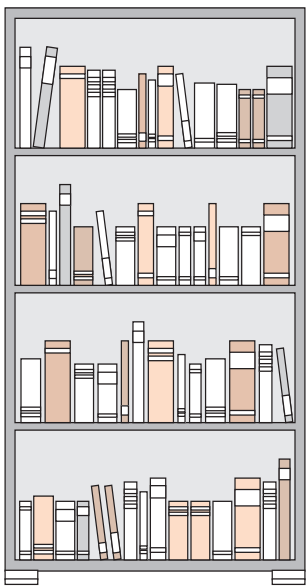
読者層の読書機会をつくる目的で読書運動が始められ、長野県立図書館による「PTA母親文庫」や鹿児島県立図書館の「母と子の20分間読書運動」などが注目されていた。しかし、これらの読書運動は、読書会などの団体を対象としたもので、個人の多様な読書要求に応えるものではなかった。

戦後の新教育への期待が高まる中、社会教育の分野では読書のもつ教育的な意義が注目されていた。日本図書館協会は、一九六三年『中小都市における公共図書館の運営』を発表し、戦前の大図書館による資料保存を重視した図書館のあり方を否定し、「中小公共図書館こそ公共図書館のすべてである」と宣言し、図書館法の第三条が国民への奉仕を掲げていることを踏まえ、資料を貸出することこそが公共図書館の使命であることを訴えた。

その二年後の一九六五年、児童文学作家で翻訳家の石井桃子が、自身が主宰する子どものための家庭文庫での七年間の記録をまとめた『子どもの図書館』（岩波新書）を刊行する。石井は、「外国の児童図書館から、目を日本の児童図書館の現状に移しますと、あんなとしないわけにはいきません」と述べ、「まだまだ一般市民への図書館サー

「大沢家庭文庫」を開いていた栗山規子は、「子どもによい本をめぐりあわせるのは大人の責任」、「図書館分館整備の立ち遅れている三鷹市での読書活動の一端をになう」などの使命感に裏づけられた文庫設置の理由は、「子どもたちにも本を読み聞かせる楽しみ」というただ一つの理由の前ではすっかり光を失ってしまうのだ」と、文庫活動に惹かれる本音を語っている。

家庭文庫などの読書運動の発生と特徴について児童文学研究者の鳥越信は、「日本独自の、世界にあまり例をみない独特の運動形態である」と述べ、その理由を三つ上げている。第一は、子どもを取りまく読書環境の後進性、貧困性であり、特に公共図書館の普及率の低さが、一種の自衛手段として文庫を生み出したということ。第二に、子どもの本の出版状況の劣悪さが、子



どもに良い本をと考える者に「選択」という主要なテーマを負わせることになったこと。第三に、子どもに対する家庭教育は一切母親が押しつけられるという、男女差別に根ざした婦人の社会的地位のあり方にある、と整理している。いずれも日本の後進性と貧困性の中から読書運動が必然的に生まれなければならなかったという状況を指摘している。

教育文化学者で「日本子ども社会学会」を創設した藤本浩之輔は、当時の文庫活動の急速な増大の理由を以下のように指摘している。一つは、経済成長と都市化の進行にともなう文化水準の向上がある一方、文化的環境は劣悪であること、二つには、テレビによる子どもの教育上の影響等、児童文化に対する不満があること、三つには、優れた児童書が生みだされてきたが、価格が高く、簡単に買ひ与えられないこと、そして四つには、こうしたことから公共図書館サービスを求めるが、実態は極めて貧しく、自分たちでやるしかない母親たちが立ち上がった、という四つである。さらに母親たちの主体的な条件として、三十年代後半の母親が多く、戦後の民主教育の中で育ち民

ビスという点では、ねむっているに等しい日本では、つきやぶつていかなければならない壁は厚いでしょう」と公共図書館の現状を憂いている。この本は全国の母親を中心とした住民に読まれた。やがて「家庭文庫」は、子どもの読書による成長と、子どもがよい本と出合うことを願う母親たちによって、全国各地に開設されていった。娯楽に乏しかった当時の子どもたちは、こぞって家庭文庫の熱心な利用者となり、文庫主宰者は住み開いた居室の狭さと、子どもの本の不足に悩まされることになった。

家庭文庫が広がり始めていた一九七〇年、日本図書館協会から『市民の図書館』が発刊された。「貸出し」「児童サービス」「全域サービス」を公共図書館サービスの重点施策として掲げ「市立図書館は全市民に奉仕すること」を宣言した。この本は多くの住民、とりわけ文庫主宰者に熱心に読まれることとなり、各地で行政に対して文庫への団体貸出要求が行われ、やがては図書館づくり住民運動へと発展していくこととなった。

しかし文庫関係者は、決して社会的要請のみを理由に文庫活動を行っていた訳ではなかった。東京都三鷹市で

けている世代であること、児童文化のきわめて貧しい時代に児童期を送ったということの二点を上げている。文庫主宰者である母親たちは、文庫による連帯を深めるため文庫連絡会を組織し、文庫への団体貸出冊数の拡大を要求し、さらには署名を集め議会への陳情や請願を通して、公共図書館設置要求を運動化していく。そこには、わが子だけでなく、地域の子どもの健全な成長と主体的な人間形成を願い、読書環境を大人の責任として保障しようとする姿と、こうした教育と文化の発展に関わる公的サービスを、行政の責務として求める主権者としての「市民」の姿が浮かび上がる。

戦後の図書館づくり運動は、母親を中心とした女性たちによる近代市民の活動として展開されたのと同時に、一人ひとりの人間としての主体性の解放としても、女性史に刻印されるべき出来事ではなかったかと思う。

【主要参考文献】

日本子どもの本研究会『子どもの本と読書運動』童心社、一九七一年。
藤本浩之輔『子ども遊び空間』日本放送出版協会、一九七四年。
図書館問題研究会『図書館づくり運動入門』草土文化、一九七六年。

第49回

●連載●イギリス女性生活誌
バイブルウーマンの誕生、
そして教導者的存在へ

松浦 京子

京都橘大学名誉教授

前回では、デイストリクト・ヴィジ
テイニング、すなわち慈善篤志組織によ
る訪問教化活動の実働部隊に労働者階
級女性、言い換えればヴィジテイ
ングのターゲット階層の女性たちが
登場するに至った過程を、彼女たちが
活用しようとする側(中流階級側)の論
理に基づいて説明した。それでは、実
働部隊となった労働者階級女性にとつ
てはどうであったのだろうか、また、
彼女たちの訪問(教化を目的とする、
かなりおせっかいなもの)を毎週毎週
受ける労働者家庭にとって、それはい
かなる存在であったのだろうか。ヴィ
ジテイニングの実働部隊の女性たちが何
をしていたのかに目を向けてみよう。

まずは、前々回に登場したバイブル
ウーマン。その名のとおりバイブル(聖
書)を携えて貧民家庭を訪問する女性
を送り出したのは、一八五七年、敬虔な

国教会信者であったエレン・H・ラン
ヤード(通称R・N・ランヤード夫人)
がロンドンに設立した『バイブル・ア
ンド・ドメスティック・フィーメル・
ミッシヨン聖書と家庭のための女性伝
道会(一般的にはランヤード・ミッショ
ンと呼ばれる)』であった。聖書の配
布を伴う訪問活動は福音主義思想に基
づく庶民伝道の形態で広く見られたも
のであったが、元来的にはこれに従事



ヴィクトリア時代の風刺画、挿絵画家であるジョージ・クルックシャンクの代表作、連作
版画集『The Bottle 酒瓶』より。夫がアルコール中毒になることで一家崩壊にいたる過
程を描いたもので、8連作中の第6画。このようなアル中の夫による家内暴力が日常茶飯
事に見られるスラムがバイブルウーマンの活動の場であった。

出典: Graphic Works of George Cruikshank, Selected and Introduction and Notes by Richard
A. Vogler, London, 1979.

したのは男性で、牧師や伝道組織の活
動家(ミッシヨナリ)などの監督の下
で専従の男性雇員が訪問に当たってい
た。聖書それ自体の価値を認識させる
という意味合いから無償で配布するこ
とより貧民層には割賦にして購入さ
せ、毎週毎週代金徴収のために家庭を
訪ねて聖書について語ろうというもの
であったからである。

そうしたなか、ランヤード・ミッ
シヨンは、労働者階級女性を雇用して
専従のバイブルウーマンとして担当地
区に居住させ、困窮や病苦、生活の乱
れなどが見られる家を訪問すること、
そして、まずはなんとか聖書の一節を
読み聞かせる機会を得て聖書購入に至
らしめることを実践させたのである。
また、ヴォランタリの中流階級女性が
レイディ・ヴィジターとして彼女たちの
監督と支援にあたり、また、統括指揮
する本部組織が聖書に関わる冊子や組
織の会報誌の発行を通じて情報を発信
し寄付(資金)を集め、バイブルウー
マンの賃金、その他の活動経費を賄っ
ていた。

このような取り組みは、訪問対象家
庭と同じ階級に属す女性がヴィジター
となることで、それまでの男性や中流
階級女性による訪問よりも伝道とい
う目的をより達成しやすくなるという
発想からであり、実際、バイブルウー
マンたちは物品供与を行うこと
なく、つまり他の組織では一般的
な「施し」を行わずに訪問家庭の
なかに入り込み「おしゃべり」を
通じて対象である女性(母親)の
信頼を得ていたのである。会報
誌『ミッシング・リンク・マガジ
ン』に残されたバイブルウーマン
やレイディ・ヴィジターの手記から
は、バイブルウーマンたちがどれ
ほど粘り強く何度も訪問を繰り返
返して遂には聖書の読み聞かせ
に至ったか、講話を聴かせようと
マザーズ・ミーティングに誘いだ
していかにか成功したかなどの訪
問時の様子を読み取ることができ
る。むしろ会報誌は組織の活動
を支える会員寄付者向けである
から活動成果の披露といった意
味合いが強いが、それでも、識字

能力のない女性が多くいた一九世紀半
ば、キリスト教社会に在って聖書の存
在は知っていてもそれを読むすべのな
い者たちにとって、自分のためになさ
れる「読み聞かせ」がいかに効果的
であったかを伺わせるものである。
おしゃべりを交えながらの「読み聞
かせ」は聖書の一句、一節を初めてま
ともに耳にする女性たち、時には男性
にとっても心惹かれるものだったのだ
ろう。とくに病苦などで弱った状態に
あるときには有効であったことは想像
に難くない。それゆえだろう、ラン
ヤード・ミッシヨンは間もなくして最
大規模のヴィジテイニング組織となり、
地方都市にも、そして海外にもバイブ
ルウーマンの活動を展開していったの
である。

こうしたバイブルウーマンの使命は
聖書購入者の獲得であり、組織が雇用
したパイオニアと呼ばれる専門要員に
よって獲得者数について厳しく指導さ
れていた。また、雇用と言っても薄給
であり、高齢となり引退となるとその
終の棲家は慈善施設であることも知ら
れている。ある意味、社会的下層に属
する女性がその篤い信仰心ゆえにうま
く利用されていたという解釈もできよ
う。

しかし、バイブルウーマンは単なる
聖書販売人以上の役割も果たしてい
た。彼女たちは、家庭内に孤独に居る
女性にとって「おしゃべり」相手とし
て親しい存在であり、この特性ゆえに、
聖書以外に生活改善のための有用な知
識や情報をも伝える可能性を持った
からである。それゆえに彼女たちは、
聖書の内容を正しく伝えるための学び
と並んで、有用な知識の獲得と伝達に
ついて修養を積む者でなければならな
かった。つまり下層の女性ではあつて
も教導者的役割を担うことを期待され
る存在となっていくのである。

そして、まさにこの時期、彼女たちに
よって労働者家庭に伝え広められるべ
き「最新の」生活有用情報も出現して
いた。都市化の進行にともなう環境悪
化に対応しうる保健衛生知識である。
ここに、後のヘルスヴィジターの誕生
につながる要因があったのである。

近代日本音楽史を 彩る女性たち

10
最初の国際的
プリマ・ドンナ
三浦環(その3)

佐野 仁美

本学発達教育学部
児童教育学科教授

ジャポニスムが席卷していた西洋ではオペラの日本人役が求められており、三浦環(一八八四—一九四六)は聴衆から喝采を浴びた。今回は、環の果たした役割と、日本における評価を考えたい。アメリカ滞在の一五年間に、ウィルソン、ハーディング、クーリッジの三代の大統領の前で歌う栄誉を得た環は、日本人労働者排斥問題が起っていたアメリカで、日本人のイメージアップに貢献した。一九一九(大正八)年八月三日の『読売新聞』に掲載された「新旧両世界の婦人」という記事で、イギリス文学者でジャーナリストの本田増次郎は、米国女史を感服させるには三浦環女史のように間接に東洋

進歩の広告をさせるに限ると書いている。環は、世界的歌手を輩出する日本は文明国で、その上、素晴らしい伝統音楽があることを海外に伝えた。

ボストンに滞在していた劇作家大関柀郎は、一九二二年五月一日の『読売新聞』に掲載された「日本に帰るまでの三浦環さんとその裏面の苦心」で、「吾が国の生んだ唯一の世界的芸術家」として、新しい芸術も音楽もないと日本を蔑視していたアメリカの知識人に、環は好感情を抱かせ、対外関係に利益をもたらしたと述べる。また、在バークレーの吉岡青村も、一九二三年四月一七日の『読売新聞』の「三浦環夫人の此頃」という記事で、カリフォルニア大学の演奏会で、環の歌う琴歌などを米国人が嘆賞し、在留邦人の誇りとなっていると言う。そして、「日本でさんざん皮肉られた」環にとつて、本当に理解しリスベクトしてくれる西洋は淋しくとも故郷であろうと書く。

海外で高い評価を受けていた環であるが、日本の音楽界ではどのように受け止められたのだろうか。環はヨーロッパから南米を巡演し、一九二二年四月に、九年ぶりに帰国する。すでに研究が一段落した夫は、前年に帰国していた。環は盛大な歓迎を受けるが、伴奏者として連れて来たフランケッティ

との関係を疑われ、演奏会やレコード吹込みを行って九月に再渡米する。例えば、一九二二年五月一七日の樂地精養軒における演奏会について、ピアニストの榊原直は、五月二三日の『読売新聞』で、ステージは実に慣れたものとして、オペラのアリアとドビュッシーやブラームスの歌曲を評価する一方、進歩した日本の楽界に、不真面目なものを出不さないでほしいと希望する。

プログラムの《さくらさくら》や、長唄《来るか来るか》を指すのだろう。海外で日本の歌を求められた環は、日本の歌や聴衆に親しまれる歌をプログラムに入れることを忘れなかった。また同年六月号の『音楽』では、五月二一日の南葵楽堂での独唱会について、寄席のような嬌態妖姿ではなく、厳格な芸術を期待すると書かれている。

対して、かつての生徒の山田耕柈は、一九二二年五月二一日の『サンデー毎日』に掲載された「私がマンハッタン歌劇場で観た「お蝶」—三浦環夫人の技術」という記事で、環の潤いのある声や演技に感激したことを述べ、全ニューヨークの新聞を惹きつけた、この遠来の戦士を犒(ねむら)む企てを日本の音楽界で聞かないことを遺憾とする。

一九二九年に夫の死を知らせる電報を受け取った環は、ようやく一九三二

年五月に、ミラノからシベリア鉄道を經由して帰国し、各地で八〇回あまりの独唱会を催した後、一月にイタリヤに戻った。音楽評論家の野村光一は、一九三二年七月号の『月刊楽譜』における評で、相当の年齢であるにも拘らず妙齢の子女のような心持が漂い、未だ若々しさが宿る天成の美声と正確な唱法に加え、オペラのような身振りを伴う力強い表現力を持ち得ることに驚嘆している。

環は欧米での二〇年間に、ジリー、ラザロらの最高のテノール歌手と共演し、本人によれば二〇〇〇回目の《蝶々夫人》をパレルモで歌った後、一九三五年一〇月より日本に定住する。翌年六月二七日に歌舞伎座で上演した《蝶々夫人》は、環による全演出を見る機会がなかった日本で世界的プリマ・ドンナの歌を聴こうと、オペラを知らない者もつめかける盛況だったという。

村松友視の祖父で環の遠縁にあたる小説家、村松梢風は、「三浦環」という文章で、環のピアノシモは日比谷公会堂や日劇の三階壁際までハッキリ通り、満場肅然として音なき中を、蚤が

糸を吐き出すように、美しい声が天女の調べそのままに、絶えなんとしては続いたこと、六〇になっても、一八娘のような純情と、無邪気さをもっている環は、金の取れない芸術家ではなくては芸術家でない、という日本の音楽界では「芸人」扱いされていたと書く。美しい最弱音で後方の客席まで聴かせるのは、至難の技であるが、ストイックに芸術を追求する態度が尊ばれていた日本では、売れる「俗っぽいと受け取られがちであった。

戦前イタリアに滞在した詩人の深尾須磨子も、「三浦環《気どりなく、誇り持つ》」というエッセイで、悲恋のバタフライに同化した環の至芸に打たれたことを告白し、オペラの本場の人々から絶賛され、虚飾ぬきの童心を地で生き抜いた環は、旧日本のような社会ではずいぶん損もしただろうと述べる。

以上のように、日本で西洋音楽の研究に勤(いそ)む音楽家に比べ、長期にわたって欧米で活動した環は、海外の人たちの反応を肌で感じて自国の文化を再発見し、愛国心からそれをアピールした。しかし、封建的な「蝶々夫人」つまり外国人に都合良く、新しい時代ではマイナスのイメージの女性を、外国人受けするように演じて大成功を取

めた環へ、国内からは賛辞ばかりが贈られたわけではない。当時の日本人として破格の技術、美声と豊かな表現力を持っていたが、海外で芸術家として尊敬を集める様子を目のあたりにはいない日本人からは、「芸術家というよりも芸人」と見なされる傾向があったことは否めない。真偽はともかく、恋愛沙汰がゴシップになっても一切言いつけをしない環の、率直で日本人離れた言動は、誤解されることも多かった。芸術を求めて、自らの道を貫く生き方が、「夫に仕えるのが女性の美德」であった戦前日本の社会に受け容れられ難かったことも一因であろう。

疎開先の山中湖畔で老母を見送った環は、戦後すぐの一九四五年一二月に日比谷公会堂でシューベルトの《冬の旅》を、翌年三月に《美しき水車小屋の娘》の日本語訳による全曲リサイタルを行った後、癌のため五月二六日に逝った。病床ではドビュッシーを研究し、昏睡状態で《バルコン》を歌ったという。

【主要参考文献】

土屋文明他「折り折りの人第二」朝日新聞社、一九六六年。
田辺久之「新版 考証 三浦環」幻冬舎、二〇二〇年。
村松梢風「新女経」中央公論社、一九五九年。



山中湖東岸の寿徳寺にある三浦環の墓
墓碑には「うたひめはつよき愛国心持たざれば
真の芸術家とはなり得まじ」という自筆の詩が
刻まれている。

女性歴史文化研究所 第30回シンポジウム報告

歴史の中の女性を読み直す ―女性史研究のいま―

山内 由賀 本学文学部歴史学科専任講師

- 日時：2023年6月10日(土) 13:00～16:30
- 会場：キャンパスプラザ京都
- 講師：渡邊 和行 (元本学文学部歴史学科特任教授/奈良女子大学名誉教授)
「日仏の女性史研究のいま」
細川 涼一 (本学名誉教授/元本学学長)
「日本中世女性史研究の軌跡 ―脇田晴子・田端泰子氏を中心に―」
西野 悠紀子 (女性史研究者/女性史総合研究会委員)
「女性史総合研究会発足の頃 橘女子大 そして今」
- 司会・コーディネーター：野田 泰三 (本学文学部歴史学科教授/女性歴史文化研究所所長)

六月一日(土)、女性歴史文化研究所による第三〇回の節目となるシンポジウムが開催された。新型コロナウイルスによる規制が緩和され、参加者は一六〇人を超す盛会となった。シンポジウムは「歴史の中の女性を読み直す―女性史研究のいま―」と題し、本学にて教授を務められた渡邊和行氏と細川涼一氏によるフランスと日本の女性史研究の軌跡が紹介された。さらに西野悠紀子氏により、日本の女性史研究のパイオニアである女性史総合研究会の発足についても語られた。女性歴史文化研究所は創設三〇年を迎え、西欧と日本における女性史研究のあゆみをたどりつつ、研究所の果たしてきた役割をふりかえる機会となった。ここにシンポジウムの概要を紹介する。

はじめに渡邊氏が日仏の女性史研究の歴史のふりかえりとその現状について講演された。フランスで女性史は一九六〇年代の第二波フェミニズム運動のなかから誕生した。その背景には社会運動の活発化と国際社会の構造変容があったが、同時に二〇世紀に登場したフランスの社会史が近代歴史学から女性を排除してきた問題もあった。長らく選挙権の

*日仏の女性史研究のいま

はじめに渡邊氏が日仏の女性史研究の歴史のふりかえりとその現状について講演された。フランスで女性史は一九六〇年代の第二波フェミニズム運動のなかから誕生した。その背景には社会運動の活発化と国際社会の構造変容があったが、同時に二〇世紀に登場したフランスの社会史が近代歴史学から女性を排除してきた問題もあった。長らく選挙権の

*日本中世女性史研究の軌跡

次に、細川氏によって日本の女性史研究を牽引してきた脇田晴子氏と田端泰子氏の研究から、日本の中世史研究がどのように発展していったかが述べられた。

近代における日本女性史研究は高



群逸枝にはじまる。高群が原始母系制社会を理想化し、婚姻制の変化によって女性の地位が低下したという説に対し、脇田は嫁取婚という婚姻制の変化は一夫一婦制を確立させ、正妻の地位を安定させたこと。そして家父長的な「家」の内部運営は女性によって統括されていることなどを指摘し、中世における女性の地位が一概に低いといえるものではなかったと結論づけた。つづく田端は中世村落史研究からはじまり、女性史研究としても中世の女性が政治に果たした役割について評価をしてきた。たとえば北条政子については、御台所の権限に注目することにより、その執政期間を遡らせた。また、日野富子についてはそれまでの悪評に反論し、和平工作を行い応仁の乱の終結に貢献したことを評価している。このように脇田、田端による女性史研究はそれまでの通説とは異なった女性像を提示し、日本中世女性史研究のパイオニアとして現在の日本女性史研究を切り拓いてきたことが報告された。

*女性史総合研究会発足の頃

橘女子大 そして今

そして最後に女性史研究者であり、女性史総合研究会委員の西野氏が女性史総合研究会の発足について

講演された。日本の女性史研究を牽引してきた女性史総合研究会は一九七七年に誕生した。女性の大学進学率の増加とともに女性研究者が増え、女性自身が自らの歴史を学ぶ要求が高まってきたなかで、女性史の総合的研究を目指す共同組織としてスタートしたのが女性史総合研究会であった。研究会の成果としては、研究ジャンルとして女性史という分野を確立したこと、また各時代の女性の実態に関する研究が活発化し、それが社会構造の理解に影響を及ぼしたことが挙げられるだろう。一方で、女性史研究の活発化にともなう問題点も指摘された。それは、政治や文化分野での研究は発展してきたが、社会・経済分野では弱いという研究領域の偏りであり、また時代的な偏りという点である。各研究が個別分散化してしまっていて、女性史の成果を組みこんだ通史はまだまだ達成されていないという課題も指摘された。

*パネルディスカッション

以上の三つの講演に対し、フロアからは多数の質問が寄せられ、活発なパネルディスカッションとなった。ここでは二つ紹介したい。まずは、アカデミアにおける女性史研究と在野における女性史研究をどのよ

うに考えたらよいか。アカデミアは在野研究をどのように評価しているかという質問である。これに対し西野氏は、女性史研究はそもそも女性たちが自分たちのことを語ってきたゆえに色々な視点からの語りがあることを述べた。その上で、在野とアカデミアがなかなか結びつく機会が少なく、どうしても研究者による研究が主流となっており、平行状態にあるのが悩ましいという現状を指摘された。

また、二〇〇〇年代になってから、女性史もかつてのようなエネルギーを失いつつあるのではないかという疑問も呈された。それに対し渡邊氏は、社会史研究分野においては研究テーマが拡散状態にあり、各研究が小粒になってきている懸念を示された。細川氏も女性史をはじめとする歴史研究は戦後の明るい未来への希望を背景に成長してきた部分があり、二〇〇〇年代からの閉塞感が研究の個別化をすすめているのではないかと指摘された。まとめとして、女性史研究が歴史学の一ジャンルとして確立された現在、女性史はジェンダーの視点を包摂しながらさらなる発展を上げていく期待が語られて、シンポジウムは終了した。

京都橋大学女性歴史文化研究所は1992年12月に開設され（当時は京都橋女子大学。文学部のみ単科大学）、2022年度で創設30周年を迎えました。これまで女性史・女性文化をキーワードとした質の高い研究活動を展開しており、その研究成果はシンポジウムの開催や、研究紀要・広報誌の発刊などで広く社会に還元しています。

そして現在、女性歴史文化研究所は、9学部を擁する総合大学となった本学の強みを活かして、現代的視座・視点から女性・ジェンダーに関わる諸問題にも取り組むこととし、第14プロジェクト「女性を取り巻く環境I」をスタートいたしました。本プロジェクトでは、①「ジェンダーの構造を考える」、②「歴史学からみる共同体と女性」の2つの研究テーマを設定しています。

●テーマ①「ジェンダーの構造を考える ―本学学生に見る専門職能意識とジェンダーの萌芽―」

本テーマは、本学の重点研究分野「女性の歴史を学び、女性の未来を考える」の推進を目的とした「ジェンダー・ストラクチャー研究ユニット」として、現代女性の抱える問題にアプローチします（詳細は巻頭エッセイで紹介）。

●テーマ②「歴史学からみる共同体と女性」

本研究所の30年の研究成果の蓄積のうえにたつて、「共同体と女性」という基本テーマのもと、日本や世界の各地域・各時代、あるいはさまざまな立場の女性の諸活動のもつ意義を解明し、女性に関する歴史文化研究の蓄積を図ることを目的としています。

今後、テーマごとに研究会を積み重ねて知見を共有しながら活動を進め、その一端はクロノスでも紹介していきます。また、最終的には、その成果を女性歴史文化研究所シンポジウムで公開する予定です。

女性歴史文化研究所は、これからも女性史・ジェンダーの研究拠点として活動を推進し、地域や社会に開かれた大学としての使命を果たしてまいります。今後ともお力添えいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

LIME 通信

最近 SNS で、母子健康手帳の「お父さんも育児を」という、あたかも父親は育児の従たる立場であるかのような誤解を生む記述に、批判の声があがりました。父親の育児協同の意識向上を意図した記述が、逆に母親の神経を逆なでしたようです。二児の母である私自身の手帳では、一冊目には「お父さんもたくさん相手をしてあげてください」の一文のみ、二冊目では「子育てはお母さん一人ではできません…お父さんも…積極的に子育てに参加しましょう」と一歩改善。しかし、これらが約20年前のものであることを考えると現在も記述には変化は見られず、内閣府が少子化社会対策大綱で「さんきゅうパパプロジェクト」と題し、2025年までにパパの出産直後の休暇取得率80%達成に取り組む背景を考えても、ま

だまだ意識改革に至っていないように思われます。

一方で、総務省の昨年度の就業構造基本調査によると、就業者のうち女性は3,035万人で就業率も53.2%と過去最高。また育児をしている者に占める女性就業者は73.4%と前回より9.2%上昇しました。しかしながらこれは、昨今の不安定な経済情勢の中、育児と両立して働かざるを得ない状況といえるのかもしれませんが。

前述の「さんきゅうパパプロジェクト」は、ママや我が子へのパパからの感謝の意味を込めたということですが、共働き・共育で社会の実現には「イクメン」パパへの感謝の気持ちも忘れず、配偶者双方の思いやりで家族のきずなを深めたいものです。

(西野)

CHRONOS(クロノス) vol.49

発行日：2023年10月

発行：京都橋大学 女性歴史文化研究所

〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34

Tel.075-574-4186 Fax.075-574-4149

E-mail：iwhc@tachibana-u.ac.jp

